

# 徳島市常三島遺跡1998年度発掘調査概要

-共同溝建設にともなう埋蔵文化財発掘調査-

1999年1月

徳島大学埋蔵文化財調査委員会

徳島大学埋蔵文化財調査室

## 1 調査の概要

- |            |  |
|------------|--|
| (1) 遺跡の名称  | 徳島市常三島遺跡                                       |
| (2) 遺跡の所在地 | 徳島市南常三島町2丁目1番地 (図1)                            |
| (3) 調査の理由  | 共同溝建設にともなう埋蔵文化財発掘調査 (図2の黒塗り地点)                 |
| (4) 調査面積   | 178 m <sup>2</sup>                             |
| (5) 調査期間   | 平成10年(1998年)7月22日～9月4日                         |
| (6) 調査主体   | 徳島大学埋蔵文化財調査委員会(委員長 齊藤史郎徳島大学長)                  |
| (7) 調査担当   | 徳島大学埋蔵文化財調査室(室長 北條芳隆総合科学部助教授)                  |
| (8) 調査員等   | 中村 豊(大学開放実践センター助手)、山本愛子(施設部技術補佐員)、原多賀子(同技術補佐員) |

## 2 調査の経過

調査は共同溝の施工業者西松建設(担当者国安 卓)・木内組の協力のもとにおこなった。また、調査に先立ってシートパイルの打ち込みと湧水対策としてのウェルポイントの設置が西松建設によってなされた。

7月22日重機掘削を開始し、造成土を除去した。翌日から人力掘削を開始し、順次4枚の遺構面の調査をおこなった。

現地での発掘調査は8月31日に完了し、出土遺物整理・道具整理を若干おこない9月4日に撤収した。なお、途中8月8日～16日まで夏期休暇として調査を中断した。



図1 遺跡の位置



徳島大学常三島地区平面図

図2 調査地の位置

### 3 調査成果

今回の調査では以下の4面の遺構を検出することができた(図版1上段参照)。なお、遺物整理が途上のため、時期はあくまでも目安である。

#### 第1遺構面(19世紀後半) - 図1最上段

検出した遺構は、溝SD01・02、暗渠01、土壌SK01～06で、検出面の標高は約0.15mである。

溝SD02は、19世紀前半ころまで機能していた屋敷境の溝が、最終的に小溝として残存したものである。結晶片岩や瓦が多量に廃棄される一方で、ガラス片なども若干含まれていた。暗渠は直径5cmほどの竹筒を埋め込んだものである。従来の調査では、この面から耕作痕や畝状の遺構を検出することが多かったが、今回はこれらをみいだせなかった。

#### 第2遺構面(18世紀末～19世紀前半) - 図3上から2段目、図版1下段

検出した遺構は、溝SD201、土壌SK201～220で、検出面の標高は約0mである。

溝SD201(図版2上段)はこの時期に営まれた屋敷境の溝と考えられる。江戸後期の絵図によると、本調査区は南端の一部を牧家、その他の大半を市川家の屋敷地によって占められていたとみられる。おそらく両家屋敷地の境界に営まれたものであろう。幅4.6m、深さ0.5mをはかる。溝のなかからは、多数の陶磁器、瓦類とともに、直径0.5mほどの車輪(機織り用か)2個や1辺2.4mほどの木枠などが出土した。

本調査地のすぐ西にあたる、1997年調査の総合情報処理センター新営地では小規模な溝が2条検出されており、少し違った様相を示している。

土壌203からは、貝・獣骨類が出土した。

#### 第3遺構面(18世紀後半) - 図3上から3段目

検出した遺構は、溝SD301・302、暗渠301、土壌SK301～312で、検出面の標高は約-0.2mである。

溝SD302はおそらく屋敷境の溝であろう。第2遺構面のSD201より北に5.5mほどずれて掘削されており、南側の掘り込みを検出することはできなかった。深さは0.4mをはかる。暗渠301(図版2中段)は、南側の牧家側に瓦を利用して造られたものである。

#### 第4遺構面(17世紀末) - 図3最下段、図版2下段

検出した遺構は、土壌SK401～406、SP401である。地山の砂層に掘り込まれていた。検出面の標高は約-0.45mである。

### 4 出土遺物

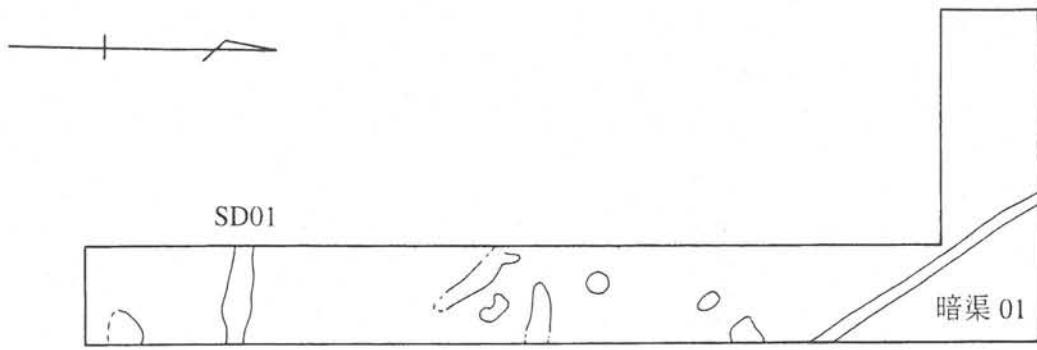
出土遺物は以下の通りである。

陶磁器類	コンテナケース	17箱
瓦類		同14箱
木器類		同5箱
石類(金属・ガラスを含む)		同1箱
計		37箱

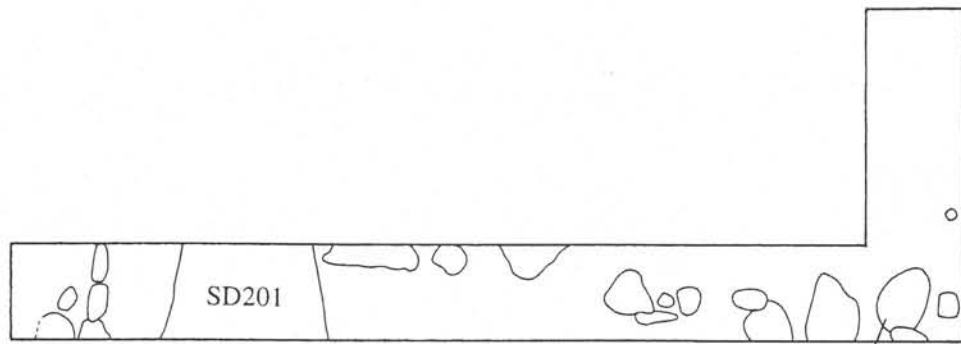
従来の調査に比べて量的には少ない。これらの遺物は目下整理・調査中である、詳細は今後の課題としたい。

## 5 まとめ

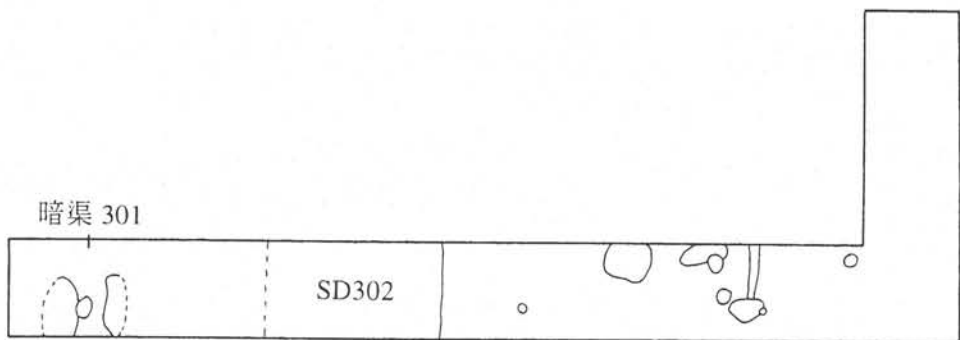
今回の調査では18～19世紀代の武家屋敷の屋敷地の一部を発掘した。建物そのものにかかわる遺構は検出できなかったが、屋敷地の境界を画する溝を検出することができた。また、ウェルポイントを調査当初から設置したかいもあって、従来は調査困難であった17世紀代の第4遺構面を検出することができた。一面の砂地の上に、いかにして屋敷地を形成したのか、今後の調査課題としたい。



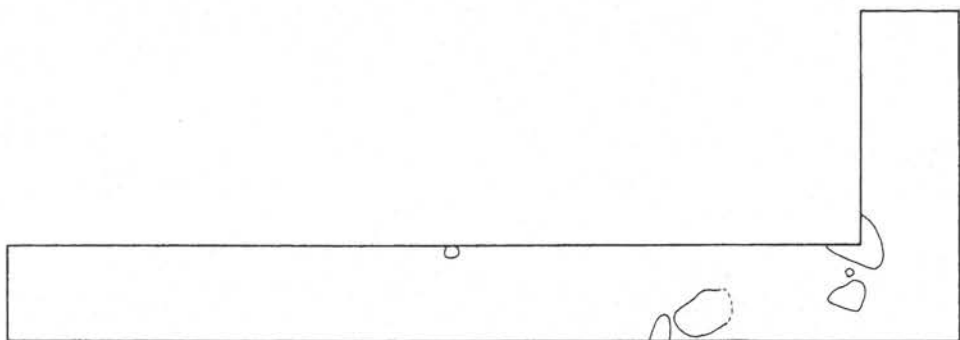
第 1 遺構面



第 2 遺構面



第 3 遺構面



第 4 遺構面



图 3 遺構配置图





基本土層



調査区の全景  
(第2遺構面南から)





SD201 遺物出土状況



暗渠 301 (第 3 遺構面)



第 4 遺構面完掘状況